

2009年12月25日

## 鬼北町庁舎（旧・広見町庁舎）の建築史的価値評価書

東京工業大学大学院教授  
藤岡 洋保

貴鬼北町庁舎（旧・広見町庁舎）は、株式会社レーモンド建築設計事務所の設計、清水建設の施工により、1958年に竣工した、鉄筋コンクリート造3階建て、延床面積1,750 m<sup>2</sup>の建物です。当時レーモンド事務所代表取締役で、地元出身の中川軌太郎<sup>のりたろう</sup>（1898-1967）の関係で同事務所が担当することになったといわれています。その歴史的価値は以下の3点に認められます。

- 1) 日本近代を代表する建築家アントニン・レーモンドの爛熟期の作品であり、その特徴をよく備えている。
- 2) 平面計画（間取り）がよく考えられており、それに対応するデザインも完成度が高い。
- 3) HPシェルという、当時としては革新的な技術が用いられている。

1) アントニン・レーモンド（Antonin Raymond、1888-1976）は、チェコ生まれのアメリカ人建築家で、帝国ホテル（1923）を設計していたフランク・ロイド・ライト（1867-1959）に随伴して1919（大正8）年末に来日した。1922（大正11）年に独立して日本で設計事務所を開き、戦争のため1937（昭和12）年から10年間アメリカに帰国していた以外は、1973（昭和48）年まで日本で設計活動を続けた。

来日したのは、「近代建築」と呼ばれる、西欧で誕生した新しい建築が日本に導入されはじめた頃で、彼は、日本におけるそのパイオニアとして日本の建築界をリードすることになり、彼の下から前川國男（1905-86）や吉村順三（1908-97）、増沢洵（1925-90）ら、日本近代を代表する建築家が輩出した。代表作に、自邸（1924）、東京女子大学チャペル・講堂（1934）、リーダーズ・ダイジェスト東京支社（1951）、群馬音楽センター（1961）、南山大学（1964）などがあり、いずれも日本近代建築史上の傑作とされている。

その設計の特徴は、近代建築の教義に則り、近代技術を活用しつつ、合理的な平面計画をもとに、それらをシンプルなデザインにまとめ上げることで、特に鉄筋コンクリート造を使ったデザインにおいて新しい可能性を追求した点が特筆される。それは、プリキャスト・コンクリートを活用した東京女子大チャ

ペル・講堂や、折板構造の特性を最大限に生かした群馬音楽センターなどに顕著に認められる。レーモンドの建物には恣意的な要素はなく、建築に必須の要素を用いて、無駄のない、それでいてユニークなデザインを展開したというのが彼の建築で注目すべき点である。旧・広見町庁舎（現・鬼北町庁舎）は、レーモンドがもっとも脂の乗った時期（1950年代、60年代）の作品で、以下に示すように彼のデザインの特徴がよくうかがえるものである。

2) 貴庁舎は3階建てで、1階にオープン・カウンター形式の総務・税務・厚生・収納という、町民がよく利用する課を配し、2階には町長室や会議室など事務関係諸室があり、3階は町議会や議長室、議会関係諸室などに使われていた。つまり階ごとに異なる機能を割り当てるという方針で設計され、ホールに配された階段によって各階がつながれていた。全体に非常にコンパクトで、よく整理された平面計画（間取り）になっており、それらが7m×5.4mの区画（ホール部分は、7m×2.7m）を基準に巧みにまとめられ、長手方向には一面に窓が配されている。ちなみに、長手方向のスパンを長め（7m）にとっているのは、建物の長手方向の立面の水平感を強調することによって、おそらく建物をエレガントに見せたいがためである。

3) 3階ほぼ中央に位置する議場は14m四方の無柱の空間で、その上に架かる屋根には、大スパンに対応するため、HPシェル（双曲放物面ともいい、グリッド状の直線でできた平面の1つの辺をひねることによって曲面をつくり出すもので、日本では戦後に試みられはじめた技術）が採用されている。当時の最新技術がここに適用されているわけで、この建物の構造でもっとも注目される点である。

それに関連して、議場の4辺中央には2.7m間隔で2本の柱がセットで配され、各壁面が相称になるようにしているなど、細部に至るまで周到的な気配りが見られる。その2本の柱はその下の外壁部分では間に1本加えられて3本になって、議場部分の外壁がその両側より少し張り出して設けられていることとあいまって、立面のアクセントになっている。このような柱の配置、議場部分の壁のわずかな張り出し、屋根のHPシェルという、建物に必須の要素だけを用いて、品格を保ちつつ、変化のある立面に仕立てあげているあたりは、レーモンドの非凡さをうかがわせる。

ちなみに、議場のHPシェル屋根と壁との間に丸いガラスブロック（色ガラスが入っている）をはめたブロックを配しているのは、その部分の剛性を確保しつつ、光を採り入れられるようにするためである。この議場の当初の机や椅子もレーモンド事務所が設計したものである（傍聴席部分を除いて、いまは取り替えられている）。

また HP シェルの角の先端部を逆方向に折り曲げてその内側を樋のスペースとし（樋がその内側、つまり柱位置に納まるように工夫し）、屋根が垂れた感じに見えないように工夫している点にも、この建物にかける設計者の意気込みが感じられる。それ以外の豎樋頂部を桁のように張り出してデザインの要素にしている（雨水がそこから溢れ出すのを防ぐためでもある）のも注目される点で、ここにも建築に必須の要素を活用してデザインするという近代建築的なやり方が展開されている。

以上のように、小規模な建物ではあるが、与えられた設計条件にきちんと対応しつつ、近代技術を活用してシンプルなデザインにまとめあげているわけで、細部までていねいに設計されていることを含め、近代建築の正統的なやり方を展開した例として、また 1960 年前後の日本の建築界のデザインや思想をよく示す例として注目すべき建物である。

ちなみに、玄関庇や1階カウンターに変更が見られるものの、サッシュを含め、全体として当初の姿をまだよくとどめていることも評価される。